

## Sherwood Anderson 研究

——Windy McPherson's Son に於ける虚構性——

小園 敏 幸

シャーウッド・アンドスン (Sherwood Anderson, 1876—1941) が小説家を志したのは、マリエタ D. フィンリー (Marietta D. Finley, 後の Mrs. E. Vernon Hahn) に宛てた1916年12月8日付の書簡<sup>(1)</sup>によると、1910年である。

1910年といえば、アンドスンが Anderson Manufacturing Company を経営していた時である。その翌年、彼は会社名を変えて、新しい塗料会社 American Merchants Company の経営者となり、アメリカの物質主義の好況時代の波に乗って、実業家として一廉の成功をおさめる。しかし、1912年11月28日、彼は商用の手紙を女性秘書のフランシス・シュート (Frances Shute) に口述筆記をさせていた時、突然、会社から出て行く。数日後に約40マイル離れたクリーヴランドに現われるが、一時的に健忘症にかかっており、病院に収容される。この時の様子については、1912年12月2日、月曜日の *Elyria Evening Telegram* の一頁の “ELYRIA MAN IS FOUND DAZED IN CLEVELAND” という見出しの記事が参考になる。<sup>(2)</sup>

医師の診断によると、アンドスンの病気は “severe mental strain and overwork”<sup>(3)</sup> が原因である。しかし、それも “・・・will gradually wear off. The patient had not been able to tell anything of his four days of wandering”<sup>(4)</sup> と医師は語っている。

アンドスンが neurasthenia になった具体的な原因は *Elyria Evening Telegram* が語っているように、“Engrossed in writing Anderson worked many a night until nearly dawn and then attended to business affairs.”<sup>(5)</sup>

である。退院後、彼は自分の会社を放棄し、2人の息子 (Robert Lane, John Sherwood) と1人の娘 (Marion) と教養豊かな妻 (Cornelia Lane) を捨ててシカゴに行き、広告会社に勤める。これが、即ち、アンダスンが作家の道を進む切掛である。

彼は1914年3月に *Little Review* の創刊号に “The New Note” を寄稿し、7月には *Harper's Magazine* に “The Rabbit-Pen” という短編を発表する。そして遂に、1916年に処女作 *Windy McPherson's Son* を出版したのである。

しかし、*Windy McPherson's Son* の草案について、Irving Howe は、その著 *Sherwood Anderson* の中で次のように語っている。

All of his friends knew about his writing and some even heard him read aloud portions of his first novel. In fact, the early drafts of *Windy McPherson's Son* and *Marching Men* were typed in his office by his secretary. <sup>(6)</sup>

更に、次のように加えている。

In 1916 Anderson published the novel *Windy McPherson's Son* which he had written in Elyria, as well as several of the *Winesburg* sketches. <sup>(7)</sup>

つまり、*Windy McPherson's Son* の草稿は1913年以前にエリリアでフランシス・シュートによってタイプされていたのである。即ち、Anderson Manufacturing Company か、あるいは American Merchants Company のいずれかの事務所で完成されたことを物語っている。

1916年に出版された *Windy McPherson's Son* に偉大なる才能を費して<sup>(8)</sup> 1922年に最終章を加えて、ニューヨークの B. W. Huebsch, Inc. から改訂版を出す。

1917年に発行された *Bookman* によると、匿名ではあるが、“Chronicle

---

and Comment”<sup>(9)</sup>と題して、*Windy McPherson's Son* の初めの部分はアンダスンの人生体験に基づいた自叙伝的内容である、と述べている。

小説とは本来 fiction でなければならない。しかし、fiction は creative imagination から生まれたもので、外郭は虚構性を帯びているが、その根底は人生体験に根ざしている。故に、フォークナー (William Faulkner)<sup>(10)</sup> を引き合いに出すまでもなく、作家は経験と観察と imagination の三つを必要とすることは自明の理である。

アンダスンは the world of reality と the world of imagination の関係を “Man and His Imagination” の中で次のように述べている。

Now there are two distinct channels in every man's life. We all live on two planes. There is what we call the world of reality and there is the somewhat unreal world of imagination. These roads do not cross each other but the road of the imagination constantly touches the road of reality. It comes near and goes away. All of us are sometimes on one road and sometimes on another. I think that we are all living more of our lives on the road of the imagination, or perhaps I had better say in the world of the imagination, than in the real world.<sup>(11)</sup>

更に加えて、次のように語っている。

The work of any writer and for that matter of any artist in the *Seven Arts* should contain within it the story of his own life.<sup>(12)</sup>

故に、アンダスンは作品の中で、the life of reality のみを単に表面的に描写したり、あるいは、the life of reality から全く離れて the world of imagination のみを描写したりはしなかったのである。彼は the world of reality に基づいた the world of imagination を構成して作品を書いたのである。

*Windy McPherson's Son* は全編4部からなり、第1部は8章、第2部は9章、第3部は6章、第4部は2章である。

第1部は中西部の小村アイオワ州キャクストンを舞台とする。ウィンディー・マクファースンは甲斐性のないのらくら者であったが、その息子サムは新聞の売り子をしており、少年期には既に事業家としての才覚がある。サムが18歳の頃、母親は病床にあったが、ある日、父親が酔って帰ってきたことに対し、サムは激憤を覚えていさかいのあげく父親を失心状態に落とし入れる。その夜母親は死ぬ。それから1ヶ月後にサムはシカゴに向かう。

第1部に於けるサムの行動とアンダスのその関係を具体的に見るために、アンダスの生活史を簡単に見ることとする。

アンダスはオハイオ州プレブル郡キャムデンで1876年9月13日に生まれる。それは農本主義から機械工業による資本主義への移行という激動の時代である。父親のアーウィン (Irwin M. Anderson, 1845-1919) は有能な馬具製造業者であった。しかし、やがて馬具なども機械量産されるようになり、父親の仕事は急激に減っていく。それと共に、彼は飲酒と饒舌に耽溺していく。キャムデンで馬具店をやっていけなくなると、仕事のありそうな場所を求めて、アンダス家の居所はオハイオ州の町々を転々と変わる。ついに自分の店を持てなくなって、父親は小さな工場で働いたり、ペンキ屋になったりする。1884年、一家をあげて *Winesburg, Ohio* (1919) のモデルとなったオハイオ州のクライドという町に居を定める。だが、満足のいく仕事に就くことが出来ず、父親は益々飲酒に耽り、仲間達を集めてはあいも変わらぬ饒舌に耽溺していく。そのために、母親のエマ (Emma Smith Anderson, 1852-1895) が父親に代って一家の支柱にならなければならない。シャーウッド・アンダスの母親は *Death in the Woods* (1933) の主人公と同様に、所謂 bound girl<sup>(13)</sup> である。彼女は幼少の頃から困窮した状況の中で育ったので、どのような仕事であろうとも金になる仕事であれば忍耐強く行ない、苦しい家計の中で子供達を献身的に愛情をもって養育する。1880年代から1890年代の初めにかけては、アンダス家の収入

は不安定であったために、子供達（シャーウッドの上に2人、下には4人の弟も生まれる）も母親を助ける傍ら、新聞の売り子などをして学校教育を続ける。特にシャーウッド・アンドソンは母親に感化され、あらゆる賃仕事を精力的に引き受けたために“Jobby”<sup>(14)</sup> というニックネームをつけられる。1895年5月10日に一家の支柱であった母親エマが過労のために肺結核にかかって亡くなると、父親アーウィンに甲斐性がないために、やがて一家は離散してしまう。

さて、フロイド (Sigmund Freud, 1856—1939) 理論を通してシャーウッド・アンドソンの生活史を見ると、ここに Oedipus complex<sup>(15)</sup> の典型的な実例があることに気づく。

シャーウッド・アンドソンは幼児期に於て、母親に懐き母親を愛し、父親に対しては反抗的態度をとったのである。その後、普通ならば、男児は母親に愛されたいという願望のために、母親の愛している父親のような人間にならなければならないと考え、次第に男児は父親に近づき、父親を模倣するのである。しかし、アンドソン家に於ては、父親は家族を顧みないで飲酒に耽ける利己的な男であるために、夫婦間の精神的絆はなかったと考えられる。従って、シャーウッド・アンドソンは父親を軽蔑し、母親をわがものにし、母親の愛だけを受けて育ったに相違ない。それ故に、彼は母親への依存性が強く、彼の自我像 (Ich-Bild) は母親との二者一体実存を望んでいる。従って、彼は母親と自分とを同一視 (Identification) し、母親の考え方、感じ方、行動の仕方等をそのまま取り入れようとしたのである。故に、母親が賃仕事に精を出すように、彼は金になることならどんなことにでもとびついてアルバイトをやり、しかも、そのやり方が機敏で抜け目がなかったので、町の人達から“Jobby Anderson”と呼ばれたのである。所謂、シャーウッド・アンドソンの libido は Oedipus complex の段階に定着している。彼が19歳の時に母親は他界したが、彼女の死は彼にとって、特に痛ましく、まるで恋人が愛する妻と死別したかのように悲しみは大きかったに相違ない。

*Windy McPherson's Son* に於て、息子サムが駅に到着する汽車の乗客に

すばしっこい立ち回りで新聞を売り込むエピソードは、アンダスンの体験に基づいた事実であると言えよう。

第1部に関して、Irving Howe は *Sherwood Anderson* の中で Anderson's first book *Windy McPherson's Son*, which appeared in 1916, began with a vindictive portrait of his father full of direct resentment and aggression.<sup>(16)</sup> と述べている。

因みに、酔って帰った父親を、サムは失心状態に落とし入れる場面があるが、これはアンダスンが実際に経験した事実ではない。アンダスンの *libido* が Oedipus complex の段階に定着しているが故に、彼は常に母親のイマゴ (Imago) を追い求め、家庭を顧みない父親に対して殺してしまいたい程憎しみを抱いていたために、このようなストーリーになったと考えられる。アンダスンの分身としてのサムの父親に対する行為は、母親の不幸の原因を考える時、事実であって欲しかったという願望、否むしろ事実であるべきだとする公式伝説としての虚構である、と解することができる。

作品の中で、父親ウィンディーはある年の独立記念日にラップ手を買って出るが、ラップは鳴らない、という場面があるが、因みにアンダスンの父親もパレードが好きだったようである。<sup>(17)</sup>

第1部の終りで、母親の死後、サムはキャクストンからシカゴに脱出する場面は、アンダスンの人生に於て、母親の死後、一家は離散して、彼がクライドからシカゴへ脱出するのと合致する。

アンダスンは父親に対する情動の両価性と、貧困の中で一家の支柱となって不幸な生涯を終えた母親に対する憐みとを、素材にしているために、多少事実の歪曲はあるにしても、彼の人生を再現したものである、と言っても過言ではないであろう。従って、*Windy McPherson's Son* の第1部はアンダスンの自叙伝的内容を多分に含んでいると言えるだろう。

第2部はサムの成功物語である。シカゴに脱出したサムは、またたく間に立身出世をして、レイニー武器会社の取締役となって、会社の実権を握り、社長の娘スーと結婚する。しかし、子供に恵まれず、死産に続く死産で、2人ともそれぞれの仕事に没頭し、結局、スーは社会奉仕に、サムは

事業に生きがいを見いだそうとする。サムは会社のより一層の発展のために、名を捨て実を取り、有力なライバル会社との合併を果たす。しかし、独力で会社を築いた義父レイニーはこれに耐えられず、抗議の自殺をする。他方、サムは郷里で世話になった女教師メアリー・アンダーウッドと約束した送金のことや手紙を書くことも忘れて仕事に没頭しているうちに、彼女は死んでしまう。サムの成功物語は音をたててくずれ、彼は事業を投げ出し、妻を捨てて人間としての真の生き方を求めて旅に出る。

第2部でのサムは金と権力に恵まれて、思いのままの人生を歩めるかに見えたが、子供には恵まれず、スーとの間に目には見えない溝が生じる。事業に生きがいを見いだそうとするサムは *Winesburg, Ohio* に於ける Tom Willard と同じレベルの人間で、所謂、物質主義者にすぎない。grotesque になる資格すら持ち合わせない恥ずべき生きものである。1916年の *Masses* の2月号に掲載し、後に *Winesburg, Ohio* のエピソード全体を集約する、いわば序章の役割を果たしている “The Book of the Grotesque” の中で、grotesque についてアンダソンは語っている。要約すると次の通りである。

「人間は成長するにつれて、多くの漠然とした思想の集成物としての真理を見つけ出して行く。そして、自分に相応しい真理を見だし、それに執着して人生を過そうとした途端に、その人は grotesque になってしまう。」

即ち、grotesque というのは、人生の中で何かを求め、その結果、自分に相応しい真理に執着する人間である。

中西部に於て、機械工業中心の資本主義の時代が台頭しつつあった当時、ヨーロッパの農本主義の時代から工業中心の時代への移行とは違って、その変化は余りにも急速であった。従って、過去の経験から割り出した真理に執着して生きようとする人間は身心が離反し、彼らは life を the life of reality と the life of fancy の二つのセクションに分割せざるを得ないのである。<sup>(18)</sup> grotesque な人間は fancy の世界にとじこもらざるを得ない。the life of fancy には道徳観念はない。即ち、In the world of fancy, you must understand, no man is ugly. Man is ugly in fact only. Ah, there

is the difficulty. <sup>(19)</sup>

サムは fancy の世界で生きる必要性を感じていない人間であり、資本主義社会機構のもとで自己疎外を意識しない人間である。

“Standardization! Standardization!” was to be the cry of my age and all standardization is necessarily a standardization in impotence. It is God’s law. Women who choose childlessness for themselves choose also impotence—perhaps to be the better companions for the men of a factory, a standardization age. <sup>(20)</sup>

即ち、サムは機械文明によって、人間の主体性を奪い取られて「画一化」(“standardization”)された「無気力者」(“impotent”)にすぎない。

ところが、義父レイニーの自殺とメアリー・アンダーウッドの死によって、サムは自分も資本主義社会機構の力にあやつられた存在でしかないと悟る。金と権力に頼った生活が如何に侘しいかを悟る。そして物質主義としての今迄の人生を否定し、事業を投げ出し、妻を捨てて、真理の追求に旅立つのである。即ち、ここには grotesqueness を湛えたサムの姿を見ることができる。潜在化していた、人を思いやる心が頭をもたげ、grotesque へとサムを導こうとしている。丁度、これはアンダスンが American Merchants Company を投げ出し、妻子を捨てて、シカゴに旅立った時と合致する。しかし、合致はするけれども、アンダスンの実人生を模倣してストーリーにしたのではない。何故なら、アンダスンがこの作品を書きあげたのは、1913年以前であり、即ち、1910年から1912年11月28日の neurasthenia になってエリリアを去る前迄の間であるからだ。従って、アンダスンが妻子を捨ててシカゴに旅立った時には既に作品は完成していたのである。故に、サムが事業を投げ出し、妻を捨てて真理の追求に旅立ったのは全て虚構であると言えよう。

サムがこうした行動をとらなければならなかったのは、機械文明の力による人間の均質化こそ impotence を生み出すのだと悟ったからである。人



---

間が人間として真に生きるためには、機械工業以前の牧歌的な社会の復帰を、愛と理解による人間性の回復を、主張しなければならないのである。

アンダスンが探求する世の中を、David D. Anderson はいみじくも次のように要約している。

In moving beyond rebellion Anderson became most clearly an idealist and a romantic. He believed firmly that somewhere a life based upon compassion, love, and understanding could be found, and he sought it in the past and in the towns, where man could live communally and close to nature at the same time, finding strength and mutual fulfillment in the process of living. <sup>(21)</sup>

第3部はシカゴを脱出したサムのエリノイ、インディアナ、オハイオ、ペンシルヴェニア、ニューヨーク、ウエスト・ヴァージニアの各州の放浪と、更にはロンドン、パリ旅行を物語る。サムは労働を通して真理の追求を試みる。放浪の途中で、即ち、エリノイ州のある町で、またペンシルヴェニア州の工業都市で工場労働者のストに、サムは労働者の味方として参加する。しかし、彼は、それらを指揮している人間の中に、労働者の苦悩を理解出来ないエゴイストの姿を、更には人間性の欠如を見る。結局、サムは放浪からは真理は得られないと理解する。

第3部に於て、サムが各地を転々と放浪するというストーリーは虚構であるが、アンダスンもシカゴ、クライド、ニューヨーク、クリーヴランド、エリリア、ニューオーリンズ、リーノー、カンザスシティー、サンフランシスコ、マリオン、ヴァージニア等を放浪したことと結果的に一致する。アンダスンの場合は Oral character 特有の放浪癖に原因をみる事ができるが、サムの場合も真理の追求のための放浪であり、やはり同様の原因によるものだと判断される。Oral character の特徴としては、その他に、獲得した対象を確保する欲求、しがみつきたいという欲求、快楽主義的傾向、娯楽欲、好機嫌、情操豊かであること、気まぐれ、対象を失うのではない

かという不安等が考えられるが、その反面、孤独、隔絶、放棄、焦燥、性急、外界との非現実的な結合等も一体として包含している。

サムは労働者の味方としてストライキに参加するが、それを指揮している人間は grotesque になる資質すら持ち合わせない grotesque 以下の人間であることに、サムは気づく。アンダソンは、1931年に出版した *Perhaps Women* の中で、いみじくも次のように語っている。

In the young communist and the industrial leader there was always the same feeling. They were egotists. There was an insane kind of egotism in them.<sup>(22)</sup>

尚、*Windy McPherson's Son* が完成して、ずっと後ではあるが、アンダソンが共産主義やストライキに関心を抱いていたことがあり、1930年からその翌年にかけて、恋人エリーナー・コペンヘイヴァー (Eleanor Copenhavor) (1933年7月にアンダソンはエリーナー・コペンヘイヴァーと4度目の結婚をする。)と一緒に南部の工場を多く訪れ、労働者やストライキをしている人達を励ましている。

放浪からは真理は得られないとサムは悟り、スーが住んでいるニューヨークのハドソン河畔の村に行き、彼女の姿を見かけるが、まだ彼女に会わず顔がないと思う。結局、サムのスーのもとへの帰還は第3部では見られない。既に述べたが *Windy McPherson's Son* は1916年の初版の時点では第3部で物語は終結している。

1922年に第4部を加えて改訂版を出すことになる。

第4部はサムの放浪から妻のもとへの帰還を物語る。サムは放浪の末、1人の女性を知る。彼女は3人の子供の母親であるが、仕事のために彼らが足手まといだと言う。売りに出ている酒場を買って経営したいという彼女に、サムは金を渡して、3人の子供を引き取り、スーのもとへ帰る。スーは一瞬のためらいはあったが、サムと3人の子供を暖かく迎える。

第4部は Irving Howe によると、・・・ it is a gesture abruptly append-

ed to a novel that has been insisting continuously on the unavailability of isolation.<sup>(23)</sup> であるが、しかし、第4部が付け加えられるのとそうでないのとは大きな違いがある。第3部で物語が終結する場合は、サムが真理を追求している過程で終止符を打つことであり、彼は grotesqueness を持ち合わせてはいるが、grotesque ではなく、identity の確立がないまま物語を終ることになる。

第4部が付け加えられることにより、第3部でサムは一旦は妻を捨てたが、結局、彼女のもとへ帰還することであり、サムの developing character を意味する。

アンダスンの場合を考えてみると、1912年の末に事業を投げ出して妻を捨てたことは、離婚を意味している。この点について少し見てみよう。

アンダスンの初婚の相手はコーネリア・レインである。彼女は1854年にトリードに設立された靴問屋の娘で、1877年5月16日に生まれる。彼女は、自分の隣りに住んでいて、以前クライドに住んだことのあるゼニー・ベームス・ウィークス夫人 (Mrs. Jennie Bemis Weeks) から、1903年にアンダスンに紹介される。コーネリアは1900年6月に Western Reserve University を卒業したが、1904年5月16日の結婚まで、彼女が一体何をしていたかは明らかではない。しかし、*The College Folio* の1901年11月号の76ページと、1902年5月号326ページによると、1901年6月から1902年3月まで、ヨーロッパにいたと記されている。そして、1901年11月にはパリに滞在していたこともそれに記されている。コーネリアはアンダスンとの結婚にあたり、彼は非常に貧乏な家庭に生まれたが、母親は美しい悲壯的なタイプの女性で、父親は無責任なお人よしであったことも、予め知っていたようである。また、彼が新聞の売り子をしていたことも、更に、彼が物事に非常に熱中するタイプであるということも、コーネリアは熟知していたのである。アンダスンはコーネリアと一緒に Stevenson の作品をよく読んでいたが、次第に Carlyle, Hazlitt, Tolstoi, Dostoievsky, Borrow 等の作品へと変っていく。彼女はアンダスンに diction や rhetoric 等について熱心に教えたようである。1907年8月16日に長男ロバートが、その翌年12月31日に

は次男ジョンが、そして、1911年10月29日には長女マリオンが誕生する。アンダスは American Merchants Company の経営者となり成功をおさめるが、徐々に neurasthenia におちいり、1912年11月28日に自分の会社から姿を消してしまう。2、3日後にクリーヴランドで発見されたが、一時的に健忘症にかかっており、そのまま近くの病院に運ばれる。退院後、彼は自分の会社には戻らずに、シカゴに行き広告会社に勤めることになる。1913年に家族をシカゴに呼び寄せたが、その年の末に再び神経衰弱症状を呈したために、その翌年の夏、彼は家族と別居する。コーネリアはインディアナ州の学校教師になって、3人の子供を連れてシカゴを離れる。アンダスとコーネリアの離婚は1916年7月27日に認められる。それ以前に、彼はコーネリアの親友であるテネシー・ミッチェル (Tennessee Mitchell) と既に恋愛中である。彼とテネシーとの間で結婚の意志が固まった後に、彼の方からコーネリアに離婚を申し出ている。コーネリアは理知的であったので、アンダスとテネシーとの関係を察知し、彼らの結婚を心から祝福している。ここには忍耐と自己犠牲の生涯を送ったアンダスの実母の姿を見ることができる。アンダスがコーネリアと恋愛結婚をしたのは、彼女に母親のイマージョを求めたからであろう。結局、『愛慾心理学 総論篇』の中で、大規憲二が、いみじくも、母親に幼児的定着を持っている人間の恋愛態度に於ける特徴をあげているように、<sup>(24)</sup> アンダスは幾多類似の恋愛事件を次から次へと惹起して行く傾向を持っているのである。即ち、アンダスは自分自身の不完全さは棚に上げておいて、完全な女(母)の観念をもって恋愛に臨んでいるために、永久に自分の期待は満たされることはないからである。彼の libido が Oedipus complex の段階に定着していることを、彼は意識していないので、コーネリアとの離婚に対してはあまり罪の意識はなかったにしても、生まれた3人の子供と別れたことは、とりわけ深い罪悪感を覚えたに相違ない。

1923年12月、リーノーからロジャー・サーゲル (Roger Sergel) 宛に出したアンダスの手紙に彼の心情がよく表われている。

---

Well, you have an understanding wife and your children. That is much. I also have three children, but cannot live where they are. I see them but two or three times a year.<sup>(25)</sup>

ところで、サムが13歳の長男、10歳の次男、7歳の長女の3人の子供を引き取り、妻スーのもとへ帰還するという筋書は、アンダスンが妻と2人の男児と1人の女兒を捨てたことへの罪の意識の表われであろう。アンダスンに小説作法の指導をしたコーネリア・レインと罪のない子供達を捨てたことへの罪の償いを、せめてアンダスンの心の中だけででもしたかったのかもしれない。

第2部の終りと第3部は虚構であることが判明したが、サムの生涯を考える時、結果的に、アンダスンのそれが基本的構図になっていることに気づく。

アンダスンは貧困から身を起こし、放浪の末に実業家として立身出世をするが、やがてそれに疑問を抱き、開眼して、地位と妻子を捨てて、再び放浪し、ついに作家という地位を得る。

サムの場合も然り、貧困から身を起こし、シカゴへの脱出で実業家として成功するが、やがてそれに疑問を抱き、開眼して、地位と妻を捨ててシカゴを脱出し、放浪の末に人間性を湛えた人間として帰還する。

サムの場合、2度の「脱出」を行っているが、第2部のキャクストンからシカゴへの脱出は、金と権力が支配する世界への憧憬を、更に、そこには人間性の欠如を意味している。第3部でシカゴを脱出することは、金と権力の否定であり、終局的には、労働者への理解と、愛と、優しさを示しており、人間性を湛えた grotesque を意味している。

第4部に至り、サムは放浪の末、仕事の足手まといになると言った女性の3人の子供を連れて、妻のもとへ帰ることになるが、ここには identity の確立があり、fancy の世界に生きている grotesque ではなくて、正に grotesque を超克したサムの姿を見ることができる。

サムとスーは3人の子供達に囲まれて、以前とは違った人間的に幸福を

つかむであろうし、子供達も身心共に大きく成長するであろう。このように見ると、Boyntonが“Some Outstanding Novels of the Year”と題して *Nation* の中で、「*Windy McPherson's Son* は happiness の探求という古いテーマを扱っているが、不思議にも新鮮さを残している」<sup>(26)</sup>と述べているのも首肯できる。

尚、*Windy McPherson's Son* の改訂版を出した1922年は、アンダスンがテネシー・ミッチェルと別れて、3番目の妻となるエリザベス・プロール (Elizabeth Prall) と出会った年でもある。

#### Notes

- (1) For nearly seven years now, ever since I began writing... and I count any happiness I have had in life as beginning when I began to scribble...
- (2) *Elyria Evening Telegram*, 2 December 1921: 1.

Sherwood Anderson, head of the Anderson Manufacturing Co., and well known as “the roof-fix man” was found in Cleveland last night dazed and unable to give his name or address. He was taken to the Huron road hospital, where physicians said he was suffering from nerve exhaustion. His condition is not critical and it is expected that a few days rest will restore his memory.

Mrs. Anderson was notified of her husband's condition and hurried to the hospital. Friends here say that overwork is the cause of Anderson's sickness.

Anderson left home Thanksgiving day on a business trip. Since that time nothing has been heard from him until Monday when news of his condition was conveyed to his family and his business associates.

Late Sunday afternoon Anderson went into the drug store of J. H. Robinson, East 152 street and Aspinwall avenue. His clothes were bedraggled and his appearance unkempt. To the questions asked by the clerk in the store, Anderson replied incoherently. A physician and [a] police who were notified ordered him conveyed to Huron road hospital.

Added to the cares of the Anderson Manufacturing Co. and other enterprises in which Anderson was the guiding spirit, for the last several months he has been working on a novel and at odd times has been writing short stories for magazines. Engrossed in writing Anderson worked many a night until

---

nearly dawn and then attended to business affairs.

Two months ago he was warned by a physician that he was overworking and should stop writing. A few days later, however, he was back again at work on his book. That he has been keeping steadily at his literary endeavor was known to friends, who only a week ago remarked his fagged out condition.

It is thought overwork caused a mental breakdown when he reached Cleveland last Thursday. Anderson's identity was learned through papers found in his clothes at the hospital.

- (3) *Cleveland Press*: 2 December 1912: 2.
- (4) *Cleveland Press* 2.
- (5) Notes (2)参照
- (6) Irving Howe, *Sherwood Anderson* (California: Stanford University Press, 1966) 44.
- (7) Howe 76.
- (8) Gerald Gould, "New Fiction," *Saturday Review*, 135 (17 March 1923) 375.
- (9) "Chronicle and Comment," *Bookman*, 45 (May 1917) 307.
- (10) 1956年に New York で行われた Faulkner のインタビューが次の書誌に収録されている。

Jean Stein, "The Art of Fiction XII William Faulkner." *The Paris Review* 12 (Spring 1956) 28-52.

- (1) Sherwood Anderson, "Man and His Imagination," in Centeno, Auguste, ed., *The Intent of Artist* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1941) 44.
- (2) Anderson, "Man" 58.
- (3) Sherwood Anderson, *A Story Teller's Story* (New York: The Viking Press, 1969) 7.

Mother was tall and slender and had once been beautiful. She had been a bound girl in a farmer's family when she married father, the improvident young dandy. There was Italian blood in her veins and her origin was something of a mystery.

更に *Sherwood Anderson: Short Stories* (New York: Hill and Wang, 1962) p. 123. にも言及している。Such bound children were often enough cruelly treated. They were children who had no parents, slaves really. There were very few orphan homes then. They were legally bound into some home. It was a matter of pure luck how it came out.

- (14) Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs* (University of North Carolina Press, 1969): As a lad and in the small Ohio town where I spent most of my boyhood I was known by the nickname of "Jobby"... (p. 26) The

name of "Jobby" came to me from my fellow citizens of my Ohio boyhood town because of my insatiable hunger for jobs. (p. 27)

Kim Townsend, *Sherwood Anderson* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1987) 14.

In actuality, to ease his mother's burden, so that perhaps she herself would not have to work, so she could be cared for when she was sick, and, more generally, to offset his family's poverty, the young Sherwood Anderson worked. He worked with the energy and the intensity that would characterize him all his life. He took advantage of every chance to make a dollar and to make more dollars as he qualified for harder or more demanding jobs. He would do anything and everything. He worked in town: mowing lawns, sweeping out stores, bringing water to the men who were putting in the sewers and paving the streets; he worked in the fields: cutting corn, reaping, planting cabbages. He drove Mr. Hurd's grocery carriage, and he hung around the tracks at the fairgrounds and helped the "swipes." He worked at the printer's, he went out with his father to paint signs, he worked in the bicycle factory, and at the end of his stay in Clyde he worked in a livery stable. He was known for his ability to scramble, to get ahead. Everyone in Clyde knew him as "Jobby."

(15) James P. Chaplin, *Dictionary of Psychology* (New York: Dell Publishing Co., Inc., 1976) 354.

Oedipus complex: the child's repressed desires for sexual intercourse with the parent of the opposite sex. Originally, Freud used the term *Oedipus complex* to refer to the boy's desire for the mother, and the term *Electra complex* to refer to the corresponding desire of the girl for the father. More recently, psychoanalysts use *Oedipus complex* to refer to both sexes. The Oedipus complex was named after a Greek tragedy by Sophocles in which the hero, Oedipus, unwittingly killed his father and married his mother. In his youth the hero had had his feet pierced (*Oedipus* means "swollen feet") and was left to die on a mountain, but was saved by shepherds and fulfilled his fate.

The Oedipal state of development in early childhood is one manifestation of the early genital phase of development. Because the parents are presumed to be aware of the child's incestuous desires, and because they threaten, retaliation, the child must suppress or repress his desires. As the libido continues to demand an outlet, this is found through identification with the parent of the same sex. Thus, the child obtains vicarious satisfaction in the sexual relations of that parent with the desired one. The Oedipus complex is also partly converted into the energy needed by the child for socialization through a process that Freud



---

called *sublimation*.

- (16) howe 25.
- (17) Townsend, *Sherwood* 10.  
Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs* (North Carolina: Univ. of North Carolina Press, 1969) 37.
- (18) Sherwood Anderson, *A Story Teller's Story* (New York: The Viking Press, 1969) 77.
- (19) Anderson, *A Story* 78.
- (20) Anderson, *A Story* 195.
- (21) David D. Anderson, "Sherwood Anderson after 20 Years," Ray Lewis White, ed., *The Achievement of Sherwood Anderson* (North Carolina: Univ. of North Carolina Press, 1966) 253.
- (22) Sherwood Anderson, *Perhaps Women* (New York: Paul P. Appel, Publisher, 1970) 108.
- (23) Howe 79.
- (24) 大規憲二著『愛慾心理学 総論篇』(育文社, 1971) pp. 81-82.
- (25) Sherwood Anderson, *Letters of Sherwood Anderson*, edited by Howard Mumford Jones and Walter Rideout (Boston: Little, Brown, 1953) 112.
- (26) H. W. Boynton, "Some Outstanding Novels of the Year," *Nation*, 103 (30 November 1916) 508.